自閉症の子 おいでよ

ニッポン みんなで

「車中泊の一家」に支援の手
「ひとごととは思えない」

急激な環境変化が苦手な自閉症の人たち。3月22日の紙面で、周囲を気にして避難所を避け、車中泊を続けた家族を取り上げると、全国から支援の手をさしのべる声が相次いだ。ただ、声をあげられず依然苦しむ人たちに対しては、実態の把握すら難しいのが実情だ。

上家族を受け入れるとしている野田さん一家＝23日、松山市、高橋正徳撮影
下避難所で過ごす大田敦也君＝岩手県大船渡市の大船渡北小学校体育館

「車で寝泊まりした1週間は、この先どうなるのかと思った。長い時間だった」

岩手県大船渡市の大田明子さん(38)は今は大船渡北小学校の体育館で避難生活を送る。震災直後、一家は家族や親戚8人で、3台の車の中で避難生活を続けていた。自閉症の次男敦也君(10)が避難所で大声を出すなどして、迷惑をかけることを恐れたためだ。

敦也君はこの学校の特別支援学級の5年生。初めは不安そうだった敦也君を先生や友達が支えてくれた。特別に開放してもらった教室で大好きなパソコンをしたりするうちに落ち着きを取り戻した。

ただ、大声で歌を歌ったり、アニメのせりふを口走ったりするのは避難所でも変わらない。明子さんは「周囲に迷惑にならないか気になることはあるものの、予想以上に新しい環境に慣れてくれた」という。

記事が載ると大田さん一家に対し、空いている家や部屋を提供し、家族ごと受け入れたいという声が全国から多数寄せられた。この問題の深刻さを理解していればこその支援の輪だ。

そんな一人、松山市の野田佳代さん(35)は小学3年の篤史君(8)が自閉症だ。敦也君とは年齢も近いため「ひとごととは思えなかった」という。

避難生活を送ることを想像してみた。叱ることがよくないことを理解している野田さんでさえ「周囲の目が気になって、きっと篤史を叱ってしまう」。普段叱らない母親が怒るのを見て、さらにパニックになる姿も目に浮かぶ。結果的に「私も車中生活を選ぶかも」。

記事をきっかけに、明子さんと手紙のやりとりをはじめた。明子さんの手紙には敦也君の字で「ありがとう」と添えられていた。

野田さんは同じような状況で被災している人に部屋を提供したいという。

東京都の中森佐和子さん(69)も滋賀県の持ち家の提供を申し出た。

自閉症の次女(29)は、人混みで過度なストレスを感じる。散歩も早朝に限っているが、それでも「うるさい」と注意されることはある。

「外見は一般的に健常者と変わらないので、周りの理解を得にくい。誰もが余裕をなくす災害時はなおさらです」（安倍龍太郎）

把握できない事例多数

重い自閉症のある大船渡市の吉田廉さん(19)は、小さいころから母の富美子さん(45)と通っていた地元スーパーが津波で流された。大きい建物に入ることを恐れる廉さんの訓練のために通っていた場所だ。

当初、廉さんは店内でパニックになったり他の買い物客を突き飛ばしたりしたことがあった。ただ毎日通ううち、店員から「元気？」「今日は何買う？」と声がかかるようになった。そんな店員の姿を見て、買い物客たちの間に理解が広まった。「理解してもらおうと10年以上必死に訴えた。そうした場も、やっと根付いた地域も失った」と富美子さんは涙ぐむ。

一家にとって避難所は気苦労の絶えない場所だ。

体育館を「体を動かして遊ぶところ」と覚えていた廉さんは室内で跳びはね、避難中の男性から怒られた。なぜ怒られたか理解できずにパニックになった廉さんに、富美子さんは毛布をかぶせて押さえ込み、「すみません」と頭を下げ続けた。その後、廉さんは数日間、毛布をかぶって出てこなかったという。

避難所では炊き出しや掃除などが生活者同士の輪番で始まった。富美子さんは、廉さんから目が離せないため参加できなかった。迷惑はかけるが手伝いには参加できない――。

申し訳なく思う状況が続いたが、今は夫、定さん(47)の勤務先の社宅に入居できた。「自分のことを訴えられる私はまだ良い方。把握すらされないで、困っている人たちはまだまだいる」と富美子さんは声を落とす。

被災県の自閉症協会や全国自閉症者施設協議会などが、被災地の状況を調査している。その報告書には、富美子さんの心配を裏付けるかのように、各地の避難所で悩む自閉症の人や家族の姿が描かれている。

ただ、全国自閉症者施設協議会などの代表として現地を調べた森下尊広さん(33)は「避難所で見える家族は一部。行政に見えないところにいる人も多く、支援が届かない」。こうした家族は極力避難所生活を避ける傾向が強いからだ。

対応策として森下さんは「『高齢者用』『障害者用』など、必要な支援の種類に応じた避難所を作るべきだ」と訴える。専門家の数も限られるため、点在する避難所を回るより効率的に支援できるからだ。似た境遇の人が集えば、避難所に入るためらいや生活での気苦労も減るという。

ようやく築き上げた、地域の信頼の輪を傷つけられた人がいる。窮状を訴えられない人がいる。復興ではこうしたところにも目を向けてほしいと願っている。（赤井陽介）

自閉症団体「障害者や高齢者用の避難所を」

じじと毎日、家の片付け

吉田みよさん（右）と夫の敏雄さん（78）

青森

(76)「じ
家の片付
営住宅に
に暮らし
近所さん
たこと。
してさ、
」＝自宅

福島

かかる。自分には17、18歳からやってきた大工という仕事しかない。みんなの家を建てて、元気な町に戻したいです」

＝同市のグリーンピア三陸みやこ

◇

い人も出てきます。このあごひげは3月11日から一度もそっていません。ずっとそらないつもりです」

＝福島市のあづま総合運動公園

◇

南相馬市原町区、小泉百合子さん(56)「私も主人もりまわされて振りまわされて悔しいですね。今の事態は世界的にも大変なこと。そのまっただ中に私たちは置かれています。健康への影響はただちにはないと言うならば、南相馬市や飯舘村に政治の拠点を移してそこで活動してください。そ

「公園

◇

田部重幸さん

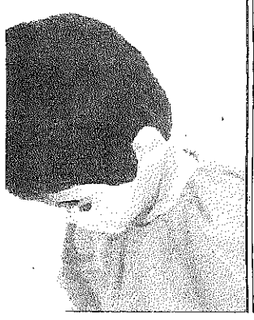
南相馬市原町区、田部重

かったけど、苗を植えた田んぼが一面緑になって、秋には黄金色になる景色を見るのが楽しみでね。苗用のハウスは流され、トラクターは故障した。元に戻すのは大変なことだよ。10年や20年で戻るかどうか。国の力が試される。俺には先は

お見舞い申し上げます。
トセラピー
な誤解があります。――
東日本大震災および原発事故から
経ちます。被災後、子供の絵の変
を痛めている大人の方も多いので
でしょうか？　お子さんの絵に
り、不安になることもあるかもし
ん。それは当然のことです。誰し
めての体験だからです。しかし、子
子供自身が描画という本能的なス
回復方法を持っています。そのプ

広告

被災者支援



学ぶということ。
それは、答えが出てしまった「今日」から未知なる「明日」を作り出すこと。
そのために、みんなで知恵を出し合い考えあう力をつけること。